

慣用句学習方略としての語源的精緻化

概要: さまざまな紙と鉛筆による実験が示してきたのは、L2 学習者が比喩的な慣用句を理解し覚えるのをその表現が持つ一語一語の起源や出典への気付きを喚起することによって助けられうるということである。著者はこの教授法を「語源的精緻化」と呼んできた。

理論的背景は①理解に関しては認知的意味理論。多くの慣用句表現の意味が任意であるというよりむしろ「動機付け」されるということを含んでいる理論だからである。②保持力に関しては二重符号化仮説。メンタルイメージとして言語情報を蓄積することは記憶の特別な道を作り出すということを含んでいる理論だからである。

本研究の中心的な目的は提案された教育的なパスウェイが学習者を L2 の慣用句の領域にどこまで導くことができるかということを探ることにある。著者は(透明・不透明の両方の慣用句を含む)400 の英語の比喩的な慣用句をターゲットにした2つの大規模なオンライン実験を行った。その結果、①かなり多くの慣用句が学習者にとって語源的に非常にわかりやすいということ、②ある慣用句の起源についての情報を与えることによって学習者は自主的にその慣用句の意味を理解することができるようになるということ、③語源のわかりにくい慣用句についてその起源の説明を学習者に与えることにはこの教授法をわかりやすい慣用句に適用するのと同様の記憶効果がある、以上 3 点が明らかにされた。

1 第二言語習得における比喩的な慣用句の妥当性 (p.53-)

近年、比喩的な慣用句は第二言語習得の分野で注目を集めている。90 年代になるまで無視されていたのは以下の3つの仮説からである。

- ①言語は一般的に「文法」か「単語」だという二分法に「慣用句」はなじまない。
- ②比喩表現は修辞法や詩などに限定されたただの装飾である。
- ③慣用句の意味は全く予測不能で、覚えるにも盲目的暗記しかない。

しかし、認知科学や言語理論の新しい見識が応用言語学へ徐々に伝わってきて比喩的な慣用句の指導法の可能性が示されてきた。

- ①「文法－単語の二分法」から「チャンクを含めた連続体」として言語が捉え直されている。
- ②隠喩の研究によって、比喩表現は日常言語に偏在していることが明らかになり、十分に情報授受をするために学習者は多くの比喩表現を身につける必要がある。
- ③比喩表現は予測不能どころかむしろ動機付けを促す。予測できないものも起源などは指導できる。「語源的精緻化」と著者が呼ぶ方略を提案する。

2 比喩的な慣用句の認知意味論的な見方 (p.55-)

ソースドメイン→概念の比喩→ターゲットドメイン

比喩表現の二つのカテゴリ

第一カテゴリ: イメージスキーマを使った比喩。

第二カテゴリ: より特化したソースドメインを使った比喩。

ソースドメイン(文化依存タイプ/異文化タイプ)

高頻度で多様性がある比喩表現はその国の歴史や典型的な事物についてのものである。

3 比喩的な慣用句の学習方略の抽出: 語源的精緻化 (p.57-)

理論的背景: 二重符号化理論と処理段階理論

先行研究(アナログな実験の良い結果)→本研究(オンラインでの実験へ)

4 教育ツールとしてのイディオムティーチャー (p.59-)

イディオムティーチャー: オンラインツール。慣用句 400 個 1200 問(慣用句辞典より。)選択方法(1)頻度順 4 段階から同数。(2)ソースドメインがリッチであるもの。(3)ソースドメインが明白すぎる慣用句は除く。

3つの問題タイプ①多肢選択式(起源選択)②多肢選択式(意味選択)③穴埋め式

5 リサーチ道具としてのイディオムティーチャー (p.61-)

5.1 リサーチ・クエスチョン

「語源的精緻化の方略は慣用句の語源が透明でも不透明でも効果は同じか？」

語源的精緻化で特定の慣用句が保持されやすいかどうかは以下の3点による。

①認知労力度、②二重符号化の可能性、③情動

5.2 実験デザイン(2002年版)

多肢選択課題(統制群は意味選択、実験群は起源選択)と1週間後の穴埋め課題。

フランドルの4年制大学(現代語・翻訳科)の英語履修生 200名(19-22歳)。

プレテストはなし。学年ごとにランダムにグループ分け。学年別で各 20~30 個の慣用句を用いて実施。

5.3 2002年版の結果と議論

問題点:①オンラインエクササイズは必修課題ではなかったため、あるタイプに偏って回答する者や全く参加しなかった者もいた。②PC サーバーの問題。→データ激減(175個)。(cf. Table 1) 発見:①起源選択の5択中2回目までの正答率 68%→わかりやすい慣用句(透明)、残りの 32% →わかりにくい慣用句(不透明)。かなり多くの慣用句が起源を予想可能。

②穴埋め問題の正答率 実験群 39% > 統制群 28%。→仮説を支持。

不透明な慣用句の方が実験群と統制群の差が少ない。→タスクデザインのせい。

起源がわかりづらい理由の分類と各理由の二重符号化の可能性への影響(+/-)。

シナリオ:①同形異義語や似た音を持つ語を含む慣用句。(+)②未知語を含む慣用句。(+)③時代遅れの語を含む慣用句。(-)④文化や故事に由来する慣用句。(-)

5.4 実験デザイン(2003年版)

4つの大きな変更点。①授業時間内で実施、②全被験者に3タイプとも実施(意味理解課題は既知確認として)、③多肢選択問題は両方とも解答チャンスは1回のみ。起源選択は三択に減。④各シリーズとも全3課題を 50 分で実施。

一部は授業時間外に実施されたので、分析からは排除した。それでも 274 の慣用句のデータが取れた。cf. Table 2

5.5 2003年版の結果と議論

2つの多肢選択課題に関して。意味理解問題の正答率、約 70%(3択によるまぐれあたりも含む)。起源選択問題、66%。偶然ではなく高い。それでも起源は慣用句習得に役立つ。

慣用句の意味理解と起源認知の高相関⇒語源的精緻化の有効性。

穴埋め問題に関して。理解問題の正答率が高い⇒穴埋めも高い。起源がわからないと正答率が下がる(cf. Table 3)。起源に関する説明は効果的な二重符号化方略であろう。

疑問。理解(+)/起源(-)の正答率が比較的低下する？まぐれと関心。

長い起源説明の慣用句の穴埋め問題の正答率。理解(+の方が下がる⇒動機づけ

6 まとめと展望 (p.74-)

比喩表現を教えること(本章では起源的精緻化)は EFL あるいは ESL に効果的である。

起源的精緻化の方略は語源的透明/不透明の両方に当てはまる。自習場面では語源的に透明なものに、明示的指導場面では両方に効果的である。

語源的精緻化の効果は二重符号化理論で説明できる。しかし、実験データからその効果は情動的要因で無駄になることもある。

語源的精緻化以外での発見。①慣用句の意味は任意ではなくむしろ動機づけられている。② L2 の慣用句の意味理解はソースドメインの認知と同時に起こる。慣用句の起源の知識は意味理解を助ける。本研究は語源的精緻化の長所を記憶技術としてだけでなく詳細な理解のための一つの方向としてもさらに掘り下げていくきっかけになるはずである。